

## 口永良部の開教と変遷

三 浦 成 雄

### 一、種子、屋久、口永良部三島の開教

薩南三島、種子島、屋久島、口永良部島の法華信仰は、日典、日良、日増の三師によって全島を法華宗に帰依せしめるに至ったが、口永良部島の開教は日増の渡島によって確立された。

日典は旧名を林応と云い、応永八年（一四〇一）の生れ、嘉吉元年（一四四一）慈恩寺池之坊より南都に遊学、四十一歳であった。文安四年（一四四七）律宗の学を成じ、帰島のため泉州堺の廻船問屋で船待ちの間、堺顕本寺の信者、按摩の太都と法論となり、顕本寺日浄と会い、尼崎本興寺日隆と法論帰伏、日典と改名した。

本興寺勸学院で法華宗義の研鑽を続け、故郷種子島に布教を發願、当時勸学院に学ぶ淡路の僧日良が二陣を約し、寛正二年（一四六一）の初夏に種子島へ渡った。

『両山歴譜写書継稿』に

「然、在ニ師座下ニ十年磋ニ宗義ニ師便許レ為ニ講師一令レ領ニ学徒一、時、淡州日良在ニ典公會下ニ終成ニ師弟、契約一且、付ニ薩州、弘化一、良公堅ニ諾レ之、と記されている。

口永良部の開教と変遷

種子島は、律宗を奉ずる事から、日典の帰した法華信仰に対して領主十代幡時をはじめ、幡時の実弟である大会寺喜道、慈恩寺円林寺と対立した。

『種子島家年中行事』には

「日典上人ハ（種子島）へ下向タリトイヘドモ、種子島ハ一統律宗ノ地ナリセバ、誰有テ崇敬スル人モナク、下向船ヨリ降り暫クノ間ハ、洲ノ崎ノ浦人当嘉吉ガ先祖ヘユカリモアリタルニヤ、此家ニ滞留シ、ソレヨリ肉縁ノ里ヲ手寄リトシ、今ノ真浄庵出ハズレ墓所ノ辺ヘ草庵ヲ結び、唯老人昼夜読経シ居ラレタリトゾ」

と記されている。

寛正四年（一四六三）四月二十一日、島民の反感は、日典を石子詰にし、殉教の師となられたのであった。日典六十三歳であった。

第二陣の日良は、永享三年（一四三一）淡路の生れ、文安五年（一四四八）、本興寺勸学院に修学、寛正五年（一四六四）二月二十五日、日隆の入滅一年後、寛正六年（一四六五）三月、種子島に発った。三十五歳である。日良は、十一代時氏公に謁し、京都の文化である茶道、歌道等を以て教化、応仁二年（一四六八）、時氏は法華宗に帰依したのである。

『種子島家家譜』には、

「日良法華を説く時氏（十一代島主）法談を聴く事数回之を信ずること倍々深し是に於て宗門を改む三島（種子島、屋久島、恵良部）始めて法華に帰す。」

と記され、時氏公の信頼をうけ、文明元年（一四六九）には本源寺を建立、明応四年（一四九五）九月十九日示寂、定光院に葬った。

第三陣の日増は、嘉吉二年（一四四二）京都に生れた。若年より日隆を師として得度し<sup>2</sup>博学多才と称された。応仁二年（一四六八）に権律師に叙せられ、翌文明元年（一四六九）には、北陸に布教し、福井顯本寺を改宗せしめ、文明十三年には、日与（両山六世）より金剛院の号を授与されている。

日増が種子島に布教したのは、領主時氏公の招請によるもので、島民の全んどが法華信仰に改宗したなかで、大会寺喜道、慈恩寺円林は律宗を固執したため、本興寺日与の命をうけて日増が渡島したのであった。

『種子島家譜』に

「長享元年<sup>丁</sup>末十一月本興寺日増上人来る。時氏、喜道、円林の改宗を欲して、之を両山に請ひしなり時氏公再び受法す」

『種子島家年中行事』には、

「種子島は元來律宗也、御家十一代左近將監時氏公法華を信仰し給ひ日典日良法印に至り改宗の企あり暫く一統帰伏是なしと云へども上の好む所下必ず是れに働ふの理にして帰伏あり然りと云へども差立たる慈恩寺和尚秀恵（清時公六男 時氏が伯父也） 大会寺和尚（清時公五男 時氏が伯父也） 此両和尚曾て承引無之共に中之村川内引籠り給ふ依之為方無く時氏公愚慮を以て日良法印を頼み願書して本山え訴へ給いたるが両本山の独歩日与上人計らいにて長享元年<sup>丁</sup>末十一月十九日右の日増上人下島し給ひ京都より御供に老僧蓮光坊、円乗坊、若僧本行坊、又若俗で菊若、鶴若、又中間土佐小次郎云慈恩寺塔中池之坊之旅宿也」と記されている。

長享二年（一四八八）六月十三日、円林房秀恵は改衣し本隆院日恵と名を改めた。

『種子島家譜』に

口永良部の開教と変遷

口永良部の開教と変遷

「慈恩寺円林、日増に謁して法論す、ついに宗旨を改めて本隆院日恵と号す是の日日増曼荼羅二幅を日恵に授与す、即ち慈恩寺に蔵す」<sup>3)</sup>

又、大会寺の喜道は、中之村川内の極楽寺に隱遁した。延徳元年（一四八九）日増は渡島の目的をはたし、帰洛した。日増四十八歳であった。

長享二年をもって種子島全島改宗が成立したと考えられる。この年より翌延徳元年にかけて、日増は屋久島、さらに口永良部島に布教し、屋久島では九十九嶽の鳴動をおさめたことよって全島が法華宗に改宗している。

『三国名所図会』に

「日隆の弟子浄光院日良上人寛正六年、彼島へ下り、法華を説き弘めたりしに、文明元年此には、種子、益救、永良部の三島尽く法華宗となる。然れども益救嶽の権現嘉納なき故にや、八重嶽時々震動し、種々怪異絶えざりしかば、土民心を安んぜず、是に因て長享二年、日増上人、長田村に渡り長寿院（此院今に長田村にあり）より使僧を以て、妙法蓮華經の法札を、御嶽に納め置しに、其使僧山中まで帰り来る此、其法札、旅院に飛返りしなり、第三度に至り、日増親ら嶽に登り、法を説いて納めたりしに、宝殿鳴動し、白鹿忽現じて、日増を礼し、忽然として見えず、是より鬪島今に至りて怪異なし、種子、益救、永良部の三島は、悉く日良、日増の開基なり」<sup>3)</sup>

と記している。

口永良部島については、法華改宗にあたっての特別な記録は見当たらないが、延徳元年日増の帰洛にあたって、

「日増を慈恩寺開基とし、屋久口永良部両島、上人を崇敬す」<sup>5)</sup>

と『三国名所図会』に記されてあることから、口永良部渡島によって島民も日増の偉徳を拝したことは明白な事実とみることができるのである。



(口永良部寝待の海岸より島をのぞむ)

日増は、この三島弘通の功績が認められ、明応元年（一四九二）本能寺貫首（両山七世）となり文龜三年（一五〇三）十一月五日示寂した。<sup>6)</sup>

明応四年（一四九五）、日良が浄光寺に示寂するが、こままでを三島弘通の第一期とみることができる。

### 一、日曠、日承の三島布教

日増の三島弘通によって、法華信仰が確立されたが、その後日増渡島より八年後、明応六年（一四九七）、日曠が種子島に布教している。日曠は、永正元年（一五〇四）両山九世として本能寺貫首となっているから、当時は三十五歳の若さであった。明応九年迄の四年間、滞在していることからみて、種子島のみならず、屋久、口永良部の両島にも足をのばしたことは十分に推察できるのである。日曠より三十七年後、天文六年（一五三七）、日承が渡島し、天文八年迄の三年間、三島に布教滞在している。こうして考えるとき、種子、屋久は勿論のこと、口永良

### □永良部の開教と変遷

部の布教は、日増が渡島した長享二年（一四八八）より、日承が渡島した天文八年（一五三九）迄の五十一年間に法華信仰が浸透していったと考えられる。

□永良部には三ヶ所の寺院跡が確認されている。元村の本行寺、赤崎イケジイベダの住吉寺、湯向の城の寺（じょんでら）である。

尼崎本興寺に現存する『遠近諸末寺名寄牒』（天保十二<sup>辛</sup>）には「隅州永良部島本行寺」とあり、『薩隅日寺院本末手控』（嘉永七寅年改之）には「屋久島一湊村本隆寺、同寺末吉田村本満寺、同末志戸子村本行寺」と記載され、本行寺以外、住吉寺、城の寺の名前はない。この事から考えられることは、日曦、日承の布教時代に、これらの三寺院が建立されたとみることができる。

### 二、□永良部の寺院

□永良部は、屋久島の西十二キロ、硫黄島の南々西三十三キロに位置する火山島で、長径十二〜十三キロ、幅は最大五〜六キロの島である。

『三国名所図会』によれば、

「古来琉球の属島で、沖永良部に対して呼ばれ、御嶽と云へる山最高し、古昔より燃続く所なり、往時大燃したることありて大石を雨し、人家を壊し死人等ありしと云へり。島地原野広き故、牧馬野あり（中略）島の南西に海灣あり、海灣の広さ半里程良港なり、故に琉球諸島より上下する船必ず此港に繫泊する所なり<sup>云</sup>」

と記されているように、琉球と本島とを結ぶ中継地点として栄えた島であった。



(口永良部の寺院跡と地名)

源平壇浦の合戦のあと、平家の残党が落ちのびた伝説もあり、永禄四年（一五五九）には、島津以久が領主となった事が記されており、それまでは種子島家の支配となっていたわけである。

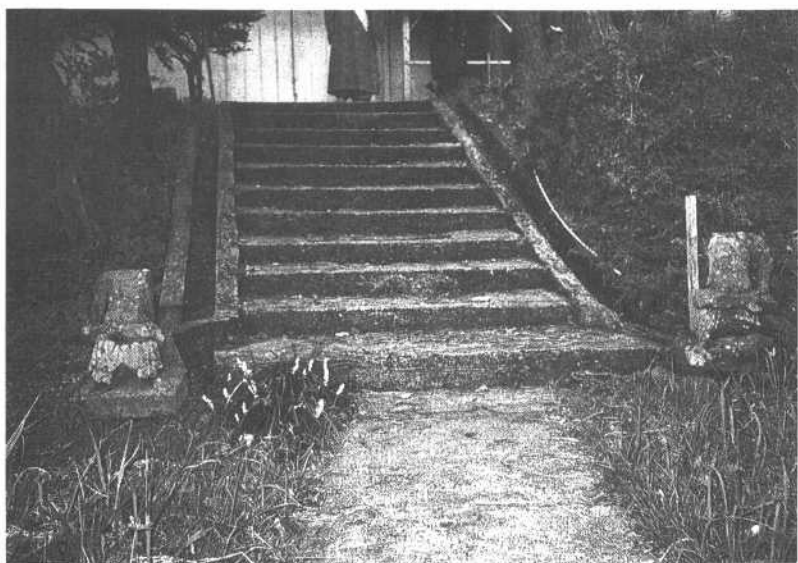
島で最も開けた地は元村で、天保十二年（一八四一）の御嶽の大噴火までは、この元村が島の中心として栄えた。それ以後、新村、岩屋泊、田代、七釜などが村落を形成していった。

イ、本行寺

元村は現在「前田」と云う村落になっているが、この地に無数の墓群が存在している。この周辺に本行寺が存在していたと考えられる。又、彦火火出尊（八幡大菩薩）を御神体とする「金岳神社」の正面鳥居の左右に仁王像があり、首と腕のない像であるが、本行寺との関係も推察できる。



(元村本行寺跡、この奥に無数の墓群がある)



(金岳神社正面鳥居の左右に立てられている仁王像)



この近くに七基の墓があり、その内五基の僧侶墓がある。

(1) 妙法  
文化四年  
宣諦院日□法師  
□月□日  
(正面)

立主屋久島宮之浦  
久本寺  
(側面)

(2) 妙法  
享和二年戊  
泰心院日秀法師  
五月十三日  
(正面)

(3) 妙法  
寛政七卯  
教授院日嘉法師  
正月二十三日  
(正面)

(4) 妙法  
明和九辰年  
定正院日孝大徳  
五月十七日  
(正面)

寛政元年酉  
六月祥八日  
屋久島顯壽寺十一世日周敬建立  
(側面)

口永良部の開教と変遷



(口永良部島金岳神社近くの僧侶墓七基)

(5) 明和四辰年  
南無妙法蓮華經日蓮大菩薩  
四月二十一日  
(正面)

本行寺番住  
教授院

(側面)

口、住吉寺

この地赤崎イケジイベダには、城があったが、永禄五年(一五六〇)称寝重長の侵略により、城が破壊され、その跡に住吉寺が建てられた。村の古老の話では、以前この地より仏具類や、僧侶が使ったとみられる茶碗や皿が堀り出されたとの事で、地形的にも海岸の近くにある平坦な場所で、三方を山で囲まれ、山道は元村に続いている。現在は竹林で覆われている。

ハ、城の寺(じょんでら)

湯向ゆむきの地に寺院があった事は、星が峰カナ女の記した伝承によって知ることができる。

その昔、種子島からきた僧侶が、城の寺に住んでいたが、島の娘に子供をませ、それを知った娘の兄が娘を殺して一本松につるした。それにまつわる怪談が語り伝えられて



写真上—口永良部赤崎イケジイベダの住吉寺跡、三方を山で  
かこまれて現在は竹林となっている。

写真右—元村本行寺跡に散在する墓群

いる。<sup>7)</sup>

又、僧侶を屋久島の永田まで送り迎えをしていた頃、かつお漁の盛んな時節に僧侶を船で送り迎えするのはめんどうだとばかりに、僧侶を海に沈めた。その場所は「坊の瀬」と云う名前で呼ばれている。<sup>8)</sup>この城の寺の跡は、現在牧場となっている。

以上島内に存在した三ヶ寺について述べたが、日承が渡島して以後、能興両山からの布教は途断えた。この時点においては、ある程度三島は安定していたと思われ、江戸期に入り、享保四年（一七一九）、本興寺僧正善院、寛保三年（一七四三）、本能寺能化恵光院、役僧本法院、智順が三島を訪ねているが、これはいづれも本山に対する冥加料の徴収が目的であった。このことは、本山の消極的布教の時代と云ってもよく、天保十二年の御嶽の大噴火によって島民は多大の災厄をうけたが、両本山からの渡島はみられなかった。当時の両山は皆久論争に明けくれ、布教体制が弱体化していたことも見逃せない。

### 三、明治以後の三島布教

明治の廃仏毀釈は全国にわたって展開されたが、特に薩摩の廃仏はきびしく、三島寺院六十三ヶ寺が廃寺となっている。

この廃仏毀釈が平静をとりもどすのが明治九年頃で、すでに明治四年（一八七二）口永良部は鹿兒島郡役所の管理となっている。

明治九年（一八七六）本能寺釈日実（両山九十一世）が種子島に、又同十一年（一八七八）には本興寺古森日経、

大阪妙苑寺牧瀬日秀が種子、屋久に布教しているが、いづれも長期にわたる布教ではなかった。その後、明治十五年（一八八二）本興寺桃井日暎、佐藤日徳が、又同十七年（一八八四）本興寺百十世信隆日秀が佐藤日省と共に種子、屋久を布教、この時本源寺が再興された。

明治三十一年（一八九八）本能寺百十四世谷日昌が渡島、淡路妙勝寺に三島の学徒四十五名を伴って妙勝寺予備校を設け宗義教育を行っているが、明治以降の布教が口永良部にまで及んだかは不明であり、明治三十三年（一九〇〇）には口永良部本村に本願寺説教所ができていたことをみても、口永良部布教は完全に途断えたとみることができよう。天保十二年以後、御嶽は古嶽と新嶽とにわかれたが、新嶽の噴火は明治に入ってから大正三年、昭和六年、同年、同四十一年、同四十三年、同四十四年、同五十一年、同五十五年と合計八回を数えている。

#### 註

- (1) 両山歴譜写書継稿十五丁ウ
- (2) 両山歴譜写書継稿二十七丁ウ
- (3) 種子島家譜 P 13
- (4) 種子島碑文 P 二六二
- (5) 三国名所図会下
- (6) 両山歴譜写書継稿二十七丁ウ
- (7) 口永良部の歴史 P 30
- (8) 口永良部の歴史 P 31

#### 参考文献

両山歴譜写書継稿

口永良部の開教と変遷

□永良部の開教と変遷

法華宗年表

三國名所図会

種子島家家譜

種子島碑文集

種子島家年中行事

□永良部の歴史

要覧くちえらぶ

法華宗宗門史

法華宗種子屋久三島布教年表

無上道 (昭63・3月号)

無上道 (昭62・5月号)

種子、屋久、口永良部三島の両山布教状況

<p>日増京都に生れる</p> <p>日増権律師二十七才</p> <p>日増北陸布教頭本寺改宗</p> <p>日増、日与より金剛院授与される四十才</p> <p>日増、種子島へ布教四十六才</p> <p>長老蓮光坊、円乗坊、若僧本行坊、若俗、菊若、鶴若、慈恩寺中池の坊泊</p> <p>日増、慈恩寺円林（秀恵）帰伏せしめて本隆院</p> <p>日恵と改む（四十七才）</p> <p>日増、屋久島、口永良部島布教</p> <p>日増帰洛、慈恩寺開基とし、屋久口永良部両島上人を崇敬す。四十八才</p> <p>日曠、種子島布教三十五才</p> <p>日曠帰洛</p> <p>日承種子島布教</p>	<p>嘉吉 二 (一四四二)</p> <p>寛正 二 (一四六一)</p> <p>寛正 四 (一四六三)</p> <p>寛正 六 (一四六五)</p> <p>応仁 二 (一四六八)</p> <p>文明 一 (一四六九)</p> <p>文明 一三 (一四八一)</p> <p>長享 一 (一四八七)</p> <p>長享 二 (一四八八)</p> <p>延徳 一 (一四八九)</p> <p>明応 一 (一四九二)</p> <p>明応 四 (一四九五)</p> <p>明応 六 (一四九七)</p> <p>明応 九 (一五〇〇)</p> <p>氷正 一 (一五〇四)</p> <p>天文 六 (一五三七)</p>	<p>日典種子島に布教</p> <p>日典種子島にて殉難六十三才</p> <p>日良種子島二陣として布教三十五才</p> <p>日増本能寺七世貫首となる五十一才</p> <p>日良浄光寺に寂</p> <p>日曠本能寺八世貫首となる</p>
--	--	---

口永良部の開教と変遷

<p>日承 帰 洛</p> <p>本興寺僧正善院、種子屋久来島</p> <p>本能寺能化恵光院、役僧本法院智順来島</p> <p>廃仏毀釈おこる</p> <p>本能寺釈日実廃仏解禁、種子島布教</p> <p>本興寺古森日経、大阪妙苑寺牧瀬日秀、種子、屋久布教</p> <p>本興寺桃井日晡使僧佐藤日徳来島</p> <p>本興寺信隆日秀、佐藤日省、種子、屋久布教</p> <p>本源寺再興</p> <p>谷日昌、三島布教し、淡路妙昌寺に学徒四五名を伴い予備校を設け教育</p>	<p>天文 八 (一五三九)</p> <p>永禄 四 (一五五九)</p> <p>永禄 五 (一五六〇)</p> <p>享保 四 (一七一九)</p> <p>享保 一 (一七二六)</p> <p>寛保 三 (一七四三)</p> <p>天保 一 (一八四一)</p> <p>嘉永 二 (一八四九)</p> <p>明治 二 (一八六九)</p> <p>明治 四 (一八七二)</p> <p>明治 九 (一八七六)</p> <p>明治 一 (一八七八)</p> <p>明治 一五 (一八八二)</p> <p>明治 一七 (一八八四)</p> <p>明治 二一 (一八八八)</p> <p>明治 三〇 (一八九七)</p> <p>明治 三一 (一八九八)</p> <p>明治 三三 (一八〇〇)</p>	<p>口永良部、島津以久の領主となる</p> <p>称寝重長屋久島侵攻、口永良部平瀬石見之を防ぐ</p> <p>口永良部検地</p> <p>口永良部(前田地方)大噴火</p> <p>口永良部検地</p> <p>口永良部鹿兒島郡役所の管理となる</p> <p>熊毛郡、馭謨郡兩郡を一管区とした兩郡合併し熊毛郡となる</p> <p>口永良部本村に本願寺説教所が出来る</p>
---	---	---